要旨

【目的】

母親が子育てを行う中で直面する困りごとに対して、保健師が育児相談の中で行っている意思決定支援のプロセスを明らかにすることである。

【方法】

自治体保健師としての経験が満5年以上あり、かつ母子保健活動の経験を有する10名を対象とし、半構造化面接を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った。なお本研究は、聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号：21-A023）

【結果】

インタビューは一人1回実施し、平均時間は62.7分（範囲46～97分）であった。

育児相談における母親の日常的意思決定の支援は『迷ったときに一歩踏み出すための拠り所になる経験を提供する』プロセスである。その経験は【母と保健師の見方を足して広げる】【「できない」を「できる」に変える】【助けてくれる人がいるということを身をもって伝える】により提供され、今の困りごとを切り口にして、その解決だけではなく今後も生じるであろう無数の困りごとに対処する母の力を培っていく支援である。【母と保健師の見方を足して広げる】は母を尊重した上で異なる見方を示し母の視野を広げていくことである。【「できない」を「できる」に変える】は母の「できない」という思い込みを「できる」という手応えに変えていくことである。【助けてくれる人がいるということを身をもって伝える】は、支援を通して保健師が助けてくれる人のモデルケースとなることである。これらの基盤となるのが、今後何度でも母が躓きを経験するのではないかと予測する【直面している困りごとだけの問題ではないと感じ取る】と、そこから日常や生育歴にまで視野を広げて困りごとを紐解いていく【母の生きる現実を想像しながら俯瞰する】である。

【結論】

育児相談における母親の日常的意思決定の支援は、今後困りごとに直面してどうすべきか迷ったときに振り返り、異なる見方に気づいたり、自信を回復して行動を起こしたり、一人で対処できないときには人に頼ったりするという一歩を踏み出すための拠り所になる経験を提供するプロセスであった。保健師は母が今後の困りごとに対して意思決定していく力をつけることを見据えて支援していた。